

「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」

ヴィシュヌ神の千の名前

エリザベス・グリムバーゲンによる紹介

「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」——ヴィシュヌ神の千の名前——は、ヴィシュヌ神をたたえる詩的な賛歌であるサンスクリット語のストートラで、神の名前のそれぞれは、叙情的な花輪を優雅に構成する花の一つ一つです。「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」を朗唱する時、私は自分自身が次々と花の蜜に浸っていき、やがて自分の存在が輝く至福にあふれたエネルギーで完全に満たされるのに気づきます。神聖な教典の朗唱と研究の両方を奨励するスワーデーヤの伝統の中で、私は頻繁にそれぞれの名前の意味と、賛歌の中でのその位置を研究し、熟考することによって、自らの体験を深めています。

私たちはその中の一つ、「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」の朗唱を、インドのシッタ・ヨーガ・アーシュラムであるグルデーヴ・シッタ・ピートゥのミュージックアンサンブルによる録音と共に、実践することができます。

1967年、バーバはこの教典を、グルデーヴ・シッタ・ピートゥのアーシュラムの日課に組み入れました。何年もの間、2006年1月まで、「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」は、昼食後に午後のスワーデーヤとして朗唱されてきました。この伝統を尊重して、2019年にグルマーイは、土曜日の朝にシュリー・ムクターナンダ・アーシュラムとグルデーヴ・シッタ・ピートゥでこの神聖な教典を朗唱することを決めました。

その名前が「すべてに浸透している」を意味するヴィシュヌ神は、宇宙を創造し、保護し、維持する究極の存在であると理解されます。この賛歌の序文で、ヴィシュヌ神は「至高の大いなる光」、「至高の偉大なるブラフマン」、そして「究極の目的」¹と表現されています。ヴィシュヌ神は、宇宙を維持する者として、宇宙が混沌（こんとん）と破壊で脅かされる時はいつでも、宇宙の秩序を取り戻すために具体的な姿を取って現れると言われます。クリシュナ神とラーマ神は、ヴィシュヌ神のアヴァタール、化身の中で、最も愛され、よく知られている化身です。

サハスラナーマ、「千の名前」は、インドの献身的な文学の、詩の一つの分野で、叙情的な韻律とリズムで歌われることを目的としています。サンスクリット語のアヌシュトゥプの韻律で作られた「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」には、ヴィシュヌ神の名前として表現された千の属性が含まれています。それぞれの名前は、彼の神聖な本質を示す、ある独特の側面や現れであり、このようにして、至高の存在は一つであると同時に無限の現れを含むという真実を伝えています。

それぞれの詩節…実に、それぞれの「名前」は、熟考と研究に値します。名前の一つ一つは、ヴィシュヌ神の限りなく豊かで多様な本質への入り口です。私はこの教典の研究で、ヴィシュヌ神の3番目の化身であるイノシシ、ヴァラーハの物語についての幾つかの文献に出会いました。巨大な牙を持つヴァラーハは、ブーミ、大地を救うために、宇宙の洪水の水の下にたどり着きます。彼の牙に持ち上げられて、大地は解放され、本来の位置に置かれて、宇宙の秩序は回復します。賛歌の中では、幾つかの名前でこの化身を呼んでいます。マハーヴァラーハ（偉大なイノシシ）、マヒーバルター（大地の保護者）、そしてヴィシャカピ（ダルマを回復するイノシシ）などです。それらの名前について熟考した時に、私は、どんなに厳しい状況であっても、神は常に、彼の信奉者だけでなく、宇宙そのものを保護し、向上させるために存在している、

そして彼は最も素晴らしく、創造的で、深遠な方法でそのように在る、という認識に至りました。

バーバ・ムクターナンダは「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」を愛し、それを「普遍的な 真理」²と言いました。バーバは続けて、「オームはヴィシュヌである。彼は純粹で、高貴な魂であり、パラマトマンである。彼はすべての解放された存在の最終的な目標である。彼は不滅である。彼は、宇宙とマインドの中で起きていることすべてを意識する至高なる目撃者である。彼はヨーガである」³と言います。

「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」は、古代インドの叙事詩、『マハーバーラタ』の第13巻、『アヌシャーサナ・パルヴァ』の中にあります。『マハーバーラタ』は、パーンダヴァ兄弟が彼らのいとこのカウラヴァたちを打ち負かし、ダルマを回復して、クル王国をその正当な統治者に戻すという壮大な戦いを描いています。戦いの後、パーンダヴァの長男であるユディシュティラは、カウラヴァの偉大なる戦士であり指導者であるビーシュマに、統治の仕方について助言を求めます。今や矢のベッドに横たわり死を待っているビーシュマは、統治者のダルマについて豊富な教えを与えることによって、ユディシュティラの願いをかなえます。これらの教えが、『アヌシャーサナ・パルヴァ』を形作ります。

第134章で、ユディシュティラはビーシュマに尋ねます。「この世で唯一の神とは何ですか。 言い換えれば、唯一究極の目的は何ですか。誰を称賛することで、誰を崇拜することで、人は善を獲得できますか」⁴。ビーシュマはこう答えます。「世界の神、神々の神、無限の存在、最高の人物——彼の千の名前によって、彼を絶えず称賛することで、人は常に高められる」⁵

「シュリー・ヴィシュヌ・サハスラナーマ」は、規律と集中力をもって朗唱されることで、それ自体の神聖なマントラの音を通じて心とマインドを浄化します。それは、その人自身の大いなる自己が、この創造のすべてに浸透し、それを維持する本質であるヴィシュヌ神と一体であるという認識へ、最終的に導くのです。



© 2021 SYDA Foundation®. 著作権所有。

¹ *The Nectar of Chanting* (South Fallsburg, NY: SYDA Foundation, 1983), p. 76.

² Swami Muktananda, "Vishnu Sahasranam," in *Swami Muktananda: American Tour 1970* (Piedmont, CA: Shree Gurudev Siddha Yoga Ashram, 1974), p. 64.

³ Swami Muktananda, "Vishnu Sahasranam," p. 67.

⁴ *The Nectar of Chanting*, p. 74.

⁵ *The Nectar of Chanting*, p. 74.